

私幼人生録

東京都日野市・日野わかくさ幼稚園園長
前・東京都私立幼稚園連合会会長

はくが
清水博雅

元気な挨拶で世界を照らし

怒り、笑い、喜びながら挑戦を続ける

★統合再結成から東京の会長を16年

東京都私立幼稚園協会、東京都学校法人幼稚園協会そして東京都私立幼稚園連盟の旧三団体が合体して東京都私立幼稚園連合会が誕生したのは1992(平成4)年。それ以来8期16年にわたって会長を務めてきた清水博雅先生が、2008年3月、その職を退任した。

東京は学校法人立、個人立、宗教法人立と異なる設置体が組織を三分している。他の府県には見られない東京独特のものである。これを舵取りするのは難しいが、宗教法人立の清水先生はやり遂げた。絶妙のバランス感覚とも言えるが、それ以上に人の心に染みいる温かい人柄、筋を通す迫力と情熱が大東京を包み込んだと言える。

月刊『都私幼連だより』の2008年3月号に、会長として最後の巻頭文を寄せている。その中に次の一節がある。

◇古代ローマで凱旋門を威風堂々と入場してくる将軍を、群衆が歓呼の声で迎える。そのとき必ず1人の従者が「将軍、この歓声にだまされてはいけません。慢心すると必ず破滅します」と耳元でささやくのだそうです。これはどんな将軍にも行われ、将軍の慢心を防ぐ慣習・儀式になっていたそうです。

私たち凡人は将軍ではありませんが、ほんのちょっとした煽(せん)に調子に乗ってしまったり、反対に少しでも貶(へん)されたり、非難されると意気消沈してしまう情けない存在です◇

この16年間、いろいろな迷いや葛藤を抱えながらも、「悩みがあるから人間は進歩するんだ」と



清水会長の16年間を支えた歴代役員、都議会、都庁関係者ら100余人が駆けつけた「清水博雅先生に感謝する会」で、「何かを残していくためには常に挑戦していかななくてはならない。これからも怒り、笑い、喜びながら挑戦していきたい」と挨拶した。(2008年6月撮影)



全日本私立幼稚園連合会では副会長(会長代行)として三浦貞子会長(右)を補佐した。(2002年10月撮影)



清水先生が「乾杯！」の音頭をとると、その会合は大いに盛り上がると言われる。清水伝説のひとつだ。写真は2008年4月に行われた「全私学観桜会」での雄姿。この乾杯を見る機会が減るのも寂しいものである。



京王線「百草園」駅のホームから見える日野わかさ幼稚園。裏に広大な山を抱える自然たっぷりの環境だ。玄関前で立っているのが清水先生。日曜日の早朝に訪ねてくる編集長をこうして待っていてくれた。望遠写真を撮ってその姿に気づき、慌ててかけ出した。

自らを戒め、そして鼓舞しながら前進してきた清水先生の心中が察せられる一文だ。

1000年の歴史を有する真言宗智山派・真照寺の住職であり、お経で鍛えた声はよく通る。文科省に行っても都庁に行っても、入り口で「皆さんこんにちは、私立幼稚園連合会です！」と大きな声で挨拶する。“元気にご挨拶”がモットーの幼稚園園長として当然の振る舞いだが、そんな挨拶に慣れていない役所の人達は、まさに飛び上がり、一斉に立ち上がって入り口を振り向く。すぐに名前と顔が覚えられ、いつしか清水先生の来訪が心待ちにされてきた。そんな人達にとっても、清水会長の退任は寂しいものだろう。

★感慨深い学校教育法の改正

全日本私立幼稚園連合会では4期8年にわたって副会長を務め、三浦貞子会長(青森県・白ゆり幼稚園=2008年5月に会長退任)不在の間では会長代行を務めてきた。

この間、三浦会長の卓抜した政治交渉力もあって、補助金の充実、教育基本法の改正などで私立幼稚園の位置づけは大きくアップした。そこには凜とした声で主張を繰り返した清水先生の存在もまた大きかった。全日私幼連で総務委員長、政策委員長を務め、東京の会長を引き継いだ北條泰雅(ひろまさ)氏(港区・みなと幼稚園)は、「交渉で難しい局面になったとき、清水先生がタイミングよく声を上げ、我々を後押ししてくれた。その一声のおかげで実現できたことがいくつもある」と振り返る。

清水先生の好きな言葉のひとつに、フランス人作家、ロマン・ロランの「怒らない人は賢者、怒る人は愚者、怒るべきときに怒らないのは男ではない」というのがある。小説「魅せられたる魂」に出てくる言葉だ。まさにそれを地でいく人で、「それはおかしい」と思ったら頑として筋を通す人なのである。

そうした数々の成果の中でも清水先生が一番感慨深く思っているのが、2007年6月に実現した学校教育法の改正だ。それまで同法一条で「学校とは小学校、中学校、高等学校……および幼稚園」となっていたのが、「学校とは幼稚園、小学校、



幼稚園とお寺の後継者である息子の清水大司先生(左)。伝統とモダンを尊重する頼もしい後継者だ。胸の名札には「清水あきひと」とあるが、これは息子つまり博雅先生の孫の名前である。訪ねた日が親子で山登りをする「親子のつどい」だったので、この日は親の立場になっていた。大司さんにはしっかり支えてくれる姉が二人いる。



10年前、叙勲のお祝いで幼稚園の先生方からプレゼントされた特製の博雅くん人形。同園の永遠のマスコットになることは間違いない。



京王線ホームで市ヶ谷行きの電車を待つダンディルックの清水先生(1998年1月撮影)。どうです、上のマスコット人形と良く似ているでしょう。

中学校……」と人間の生育順に正しく並び替えられ、学校教育のスタートが幼稚園であることが明確にされたのである。

改正前の状態では幼稚園の存在がいかに弱く、そのため保育所や託児所と同じようなものと見られたり、幼稚園から学校であるにも関わらず「学校に上がる＝小学校に入学する」と思われることが多かった。

自園でも保護者に話す機会があるときはこのことをよく話す。「学校は小学校からじゃなくて幼稚園からなんです。50年以上前からそうになっていたんですが、今回の法改正でそれがはっきりわかるようになったんです。そのことをどうか知っててください」と。

親はみんな「へ～！」という顔をして聞いているが、それを実現した立役者が目の前にいる人とは、おそらく誰も思っていない。長い間東京の会長だったことを含め、そんなことをわざわざ言うような人ではないからだ。

★国家の不条理は許してならない

2008年6月の日曜日、10年ぶりに日野わかくさ幼稚園を訪ねた。

あれこれ世間話をしているうち、「この間、浅田次郎の小説を読んでね」と、そのあらすじを情感豊かに語ってくれた。「霧笛荘夜話」(角川文庫)に収められている「マドロスの部屋」であることを後で知ったが、なかなかのストーリーテラーであった。

学徒動員で陸軍将校になった青年に、終戦直前、人間魚雷としての特攻命令が下った。本土に接近してくる米軍艦に、爆薬を積んだ手こぎボートで体当たりする無茶な作戦である。出撃前に検閲なしの手紙を書くことが許され、青年は恩師の娘さんに別れの手紙を送った。出征前に井の頭公園で一緒にボートに乗った人だ。三月の東京大空襲で両親が亡くなったため、遺書を託す相手に彼女を選んだ。青年が描いた最後のロマンだった。

恋人でもなかったが、手紙には「貴方を勝手に許嫁(いいなずけ)とっていた」「ボートの上で接吻をしたかった」と素直な気持ちを綴った。終戦のおかげで出撃は寸前で回避されたが、東京に

立幼稚園連合会



「清水博雅先生に感謝する会」では、書の好きな先生に約100人の仲間から硯が記念品として贈呈され、「いや、これは何よりありがたい」と喜んだ。贈呈するのは東京の会長を引き継いだ北條泰雅先生。



清水先生には子どもと保護者を喜ばせる特技がある。プロ顔負けのマジックで、常に、いつでもどこでも披露できる準備をしている。「ビリビリに破った紙が、鼻のアブラをちょいとつけると、あら不思議、ご覧の通り元通り」と大喝采を受けた。

戻って恩師を訪ねると、娘さんは、特攻で散った青年に添い遂げようと自害していた。その後の青年の生き方に自責と悲嘆が描かれている。

実は清水先生も同じ体験を持っている。府立二中(現在の立川高校)を卒業した清水先生は、超難関と言われた満州国立大学(新京畜産獣医大学)を受験し合格した。「満州に理想の国家を建設する」と喧伝され、皆が信じていた時代である。

母親は1人息子を必死に止めたが、学校の栄誉と人々の期待を背負って満州に渡った。しかし戦況は悪化し、ソ連が参戦することになったため、学生は特攻隊に徴用された。道路に穴を掘り、その中で爆弾を抱え、上をソ連の戦車が通ったときに爆発させるという「人間地雷」である。

幸い戦車が来る前に終戦となり自爆は免れた。

「母さんにサヨナラを言いたかった」と思いながらタコツボに入っていたが、手紙を書くチャンスを与えられなかったため、浅田次郎の小説のような悲劇は招かなかった。しかし同じ運命、境遇に身を置いたのである。

「僕は1950(昭25)年から20年近く中学校で社会科の教師をやった。まじめにいろいろなことに取り組んでいるうち、いつしか教員組合の執行委員長に担ぎ出されてしまった。幼稚園でも気がつくとうちの会長や全国の副会長に担がれ、ドロをかぶってきた。でもそれはいい。自分も承知したことだから。しかし国家が何の了承もとらず、人間、国民の人生を勝手にねじ曲げる非条理は絶対に許されないことだ」と言う。

清水先生の、国家権力や戦争に対するスタンスは常にこの一点にあると言える。そしてそれが、子ども達に自由に生きる力を身につけさせようという願いに通ずるのである。

書の得意な園長なので、子ども達との接点は主にお習字の時間にある。「真っ白い紙に墨を乗せる行為は心が落ち着いていないとできない。だから字を見ると、その子の心の有り様から家庭の様子まで見えてくる」と言う。「うん、いい字だ」という園長の一言で、たくましく成長していった卒園児は何人もいる。「挨拶」と「文字」、それが清水先生が人間を育てるマジックでもある。